

# 第四共和制の思想と行動

— サルトル・カミュ論争を再検討する — (1)

堀 田 新五郎

序 第四共和制の政治的・精神的課題 (以上、本号)

第1章 神話と政治

第2章 実存

第一節 嘔吐：サルトル

第二節 不条理：カミュ

第3章 倫理学

第一節 反抗：カミュ

第二節 アンガージュマン：サルトル

第4章 政治思想

第一節 マルクス主義：サルトル

第二節 サンディカリズム：カミュ

中間考察——メルロ＝ポンティに於ける根源的自然＝根源的歴史のテーゼ

第5章 論争

おわりに 第五共和制と残された課題

## 序 第四共和制の政治的・精神的課題

「旗を掲げて祝えとは言われていたものの、人々はそうはしなかったし、大戦は、無関心と懊悩とのなかで終焉を告げた。日毎の生活で変わったところは何一つなかった。ラジオがいくらわんわん言っても、新聞が肉太の大文字でいくら書き立てても、我々を十分に納得させるわけにはゆかなかった。我々としては、できれば、何か奇跡のようなもの、空に何かしるしのようなものでも現れて、平和が森羅万象のなかにはっきりと刻みこまれたことを証明してくれてほしかった。うっとうしい夏の午後、平和到来を告げる一門のか細い大砲の音が咳をするように鳴っていた……」<sup>(1)</sup>

J・P・サルトルに依って、このように書き出された『大戦の終末』という政治的テキストは、1945年10月、『レ・タン・モデルヌ』誌の創刊号に載せられたものである。サルトルが我々に提示するのは、戦勝国に於ける正義と自由の確信からはかけ離れた「無関心と懊悩」の光景だが、それは、単にフランスの解放が他律的であったからで

もなければ、アプレ・ゲールに必然的に付随するロマンティックな虚脱感に帰因させるべきものでもない。サルトル自身続けて書いているように、それは、彼らが「大洪水前の虚無」へと呼び戻され、今再び「世界終末の年」(L'AN Mil)<sup>(2)</sup>に佇んでいるという黙示録的認識に捕らえられていたからに他ならない。その原因は何か。何がサルトルをして、「神の死後、今や人間の死が予告されているのだ」<sup>(3)</sup>と語らしめ、懊悩する預言者の身振りを演じさせているのか。

無論第一にそれは、ヴィシー政権崩壊後、産声をあげて間もない第四共和制が直面していた政治状況の、具体的困難に求めることが可能であろう。「今日1945年8月20日、この人気のない飢え切ったパリでは、戦争は終わりはしたが、平和は始まっていないのである。」<sup>(4)</sup>ヨーロッパ、就中、フランスの権威は失われ、大戦の終末は新たに世界を主導する地位を獲得した、敵対する米ソ2大国を中心にして決定づけられていた。フランスはヤルタに参加するだけの力を持ち得なかったばかりでは

ない。フランスは、そもそも国家の意志決定機関を、レジスタンス期に分散された諸政党・諸運動機構の何処に帰属させるべきであるのか、換言すれば、如何にして国家理性を再現前させてゆくべきであるのか、この問題こそ解放後パリに於て、第一に解決させなければならない困難だったのである。周知のように、レジスタンス諸勢力は、第三共和制敗北の主要因であった強力かつ安定した執行機関の欠如を反省し、従って、強力な指導力を有する政府の樹立を急務とする点では一致していた。しかしながら、戦後ドゴール臨時政府の下にかろうじて結集していた左翼諸勢力は、彼の名に於て執行権力が強大化することを恐れ、「レジスタンス過程で提起していた『強力かつ安定した政府』理念を、ドゴールとの対抗過程で放棄し、議会が全能をもつ共和制を推進して、第三共和制の現実に復帰すること」<sup>(5)</sup>を余儀なくされてしまったのである。この時点に於て、自由と幸福を逆説的に享受していたレジスタンスの描く夢は砕け散り、「新レジームは第三共和制の轍のなかに没し去る」(オスタッシュ)ことを予告されていたのではないだろうか。以後、ドゴール派と議会派との対立が深まるなかで、軍事予算削減問題を巡る衝突からドゴールの臨時政府首相辞任・引退(45年1月20日)という帰結をもたらし、その結果、議会の中心勢力であった三党—— 共産党・社会党・MRP—— による政治主導、所謂「三党政治(Tripartisme)」が開始されることとなったのである。この三党は、無論レジスタンスを主導してきた党派であり、従って、三党提携の下にCNR綱領(共産党を中核として形成された社会民主主義的経済再建計画)の実施が進められてゆく以上、表面的には左派レジスタンスの追求したヴィジョンが現実化してゆくかのようにであった。だが、こうしたオプティミズムは、フランスが冷戦構造に支配されてゆく中で失われる。CNR綱領の具体化は、モネ・プラン(アメリカの経済援助)を基礎に行われ、それはフランスがトルーマン・ドクトリン、マーシャル・プランと続くアメリカの対ソ包囲網の一翼を、単なる一翼を任うことを意味していたのである。この動きは、その成立過程より不断に内部分裂への危機を孕んでいた三党政治を遂に、共産党の閣外追放という形で終結させることとなった。そしてこの三党政治の崩

壊以降、諸政治勢力は決定的に凝集力を喪失し、「公約政策の異なる政党間の取引・離合集散に終始して、いわゆる院内主義的駆け引き政治に墮し、ここに国民代表機関たる実体を失った議会制運営」<sup>(6)</sup>が再開されることとなったのである。

確かに46年の第四共和国憲法は、「第三共和制への反動」<sup>(7)</sup>として生み出されたものではあったが、議会に於ける多党分立の恒常化は、第三共和制以上に執行権力の弱体化を帰結させてゆくにすぎなかった。三党政治崩壊以後、フランスは中道政治体制に依る対米追随路線を模索する。しかしながら、閣外に於ける強大な左右の反米勢力—— 共産党及びドゴール派人民連合RDF —— が発する磁力に引き摺られ、或いはまた冷戦構造の緊迫化及びインドシナ・チュニジア・モロッコと拡大・激化する民族解放運動への対応を迫られる中で、中道政治体制の可能性とは、左右に振動しつつ錐揉み飛行を継続させること以外にその選択枝を持ち得なかったのである。従ってこれに対する両翼からの攻勢は必然的に強まってゆくであろう。左翼共産党は、人民戦線及びレジスタンス期に於ける「新ジャコバン主義」(=革命的愛国主義)を放棄し、スターリン的コミンフォルム路線を採用する中で、明白に対決姿勢を打ち出していく。これとは対照的にドゴールは、47年4月14日『フランス人民連合』(RDF)の結成を宣言することに依って反共勢力を結集させ、第四共和制それ自体の改造—— 新憲法の制定・政党政治の超克—— を目指していったのである。ここにフランスは、レジスタンス期に於ける幸福な統一とは対蹠的な、敵対するイデオロギー党派の乱出、国家を統合し国民をインテグレートすべき指針の欠如を経験するのであった。

第四共和制は、46年から58年までの12年間に22の内閣を登場させている。これは一見したところ、第三共和制に於ける政局の不安定を継承したにすぎぬようであるが、しかしながら我々は、二つの共和国内部での危機意識に截然と区別すべき相違を見なければならぬ。それは何か。それは、祖国フランスに対する確信の有無に他ならない。第三共和国に於いて「不安定の中の統合」が可能でありえたのは、祖国に偉大なるフランスの名が冠せられていたからであり(例えば、第一次大戦時に「神聖連合」Union Sacréeへと結集した左翼

の昂揚を想起せよ。これは、コミンフォルム路線を選択した第四共和制の共産党と対照的であろう)、父なるフランスの存在は、共和国市民の行動を支える土壌として機能し続けていたのである。

しかしながら第二次世界大戦、フランスの権威は失墜した。サルトルはこう書いている。「あの午後、咳をするようにして鳴っていた小さな大砲の音は、フランスとヨーロッパの地すべりを決定してくれるものだった。世界の他の端で下された決議は、我々の汚辱や苦悩が終わったことを教えてくれた。ありがとうと言うより他にしかたがなかったわけだ。(……) 50年来フランスが現実ではどれほどの重要さをもっているのかを蔽いかくしていた幻のヴェールが、日本人が降伏したその瞬間に破れ去ってしまった。」<sup>(8)</sup>なる程、フランス史上1940年の壊滅に匹敵する屈辱はなく、さらにはドイツ軍からの解放もまた、祖国陸軍の栄光からは遠く、アイゼンハウアーによって遂行されていったのである。第四共和制期に於ける政治の課題を検討するに際し、我々は何よりもまず「父なるフランス」「偉大なる祖国」という神話——国民を統合してゆく中心としての政治神話——が瓦解し、精神的空隙が生じていた事実注目すべきであろう。無論レジスタンスの栄光は、新たな神話作用をフランスにもたらしたはしたが、既述の如く、三党政治体制を襲ってゆく冷戦の荒波の中で、その神話は自らの強度を喪失する運命にあったのであり、今やフランスは脱神話化されていたと言わなければならない。そうであるならば、国家理性、或いは国家の意志決定機関を麻痺させていった大戦と冷戦——熱核戦争に依る世界の終末さえ予感させる冷戦・神々の黄昏の現実化——これこそが第四共和制なのであり、またそこに於ける政治的神話の喪失という困惑すべき認識こそが、逆説的に、サルトルを強いてあまりにも大仰な黙示録的情景を描かせたものなのではないだろうか。フランスは失われ、今や新たな神話作用を形成すべく、イデオロギー諸党派が闘争する時代に突入していたのである。

以上極めて性急に戦後間もないフランスの政治史を追跡することにより、サルトルが呈示した「神の死後」または「父の喪」さらには「人間の死の予告」に迫るべく試みたが、この目的に近づく為に我々は、以下引き続き、駆け足で第四共

和制の精神的な位置付けへと考察を進めてゆかなければならない。

それでは第四共和制の精神的境位とは何か。それは恐らく、ニヒリズムが遂には自らを凡庸化し、従ってニヒリズムの最終形態が露呈されてゆくその端緒である。第四共和制以降、人々は次第に人間に依る神の殺害という事実を陳腐な出来事として処理してゆくが、しかしながらまさにその点に於て、彼らは深くニヒリズムに侵されていったのではないだろうか。ニヒリズムの完成形態とは、その凡庸化に他ならない。だが、こうしたニヒリズムの最終形態と神話の不可能性との関係を検討する前に、我々はまず、ニヒリズムの展開過程を、その攻勢或いはその全面的顕現という側面から追跡し、世紀末第三共和制——一次大戦——戦間期——二次大戦——第四共和制という流れに於て簡単に振り返ることにしよう。

さて、最も遠大な精神的視角を採るならば、ヨーロッパのニヒリズムとは、キリスト教の誕生とともに古く、また、その権威が崩壊する十九世紀に至るまでキリストの名の下に隠蔽され続けてきた。これを暴き出すことに依って時代に神の死を宣告したのは、世紀末1881年、『華やぐ知恵』を提出したニーチェである。周知のようにフランスに於てもこの時期には、“根なし草”(déraciné)と呼ばれる故郷喪失者が多数現出し、ニヒリスティックな疎外感、不安感に苛まれることとなった。だが無論のこと、世紀末から二十世紀初頭に至るまで、時代精神はいまだ自然科学及び人間理性への信頼に担保された合理主義・実証主義のうちに現れ、地上にユートピアを建設せんとする進歩主義の理念は、動揺しつつもなお、その時代の指導的原理として機能しつづけていたのである。こうしたオブティミズムが失われてゆく際の分水嶺、それは第一次世界大戦(科学兵器・塹壕戦・総力戦)に他ならない。この大戦は、科学技術の発達直接的、全体的に非人間的帰結を導いていった、初めての衝撃的啓示だったのである。また同時に、一次大戦が勃発するまでには新しい自然認識が、即ち、十九世紀的合理主義を根底から揺るがす超現実主義的自然認識が、量子力学・相対性理論に依って科学そのものの内部から、集約的に表現され始めていた。更にこの大戦の期間中、合理主義的幻想は人間理性・人間の内面性

を対象としても崩壊を運命づけられてゆくであろう。この方向を決定づけたのは、無論フロイトより始まる精神分析学運動であり、従って我々はこの第一次世界大戦という時代現象のうちに、十九世紀的な合理性への信頼、理性への信頼が、雪崩の如く瓦解してゆく動きそれ自体を象徴的に看取することが可能となるのである。

このような世界大戦を経由することで、ヨーロッパのニヒリズムは生の表層にまで浮上し、その中で人間は、根源的に非合理的な存在者として立ち竦むこととなった。世界は、人間の内部も外部も理性への回収を嘲笑う不気味なものへと変貌し、従って不条理性 (absurdité)こそがその第一の特性として、世界に刻み込まれることとなったのである。<sup>(9)</sup> こうしたニヒリズムの全面的攻勢を前に、人々は、まったく新しいニヒリズムへの対処を見出してゆくであろう。それは、虚無の積極的活用、世界の意味喪失を能動的に摂取することに依ってブルジョワ市民社会の頹落を打破し、「ニヒリズム革命」を遂行せんとする立場、すなわち、ニヒリズムの効用を主張するファシズムの立場に他ならない。「人間的意味が欠落したこの世界の無垢なる生成を肯定せよ!!」このように命じるニーチェの能動的ニヒリズムを、ナチスのイデオログたちは、現実の政治的革命的テーゼとして援用していったのである。

だがニヒリズムとは、真なるもの・善なるものを嘲弄するシニシズムが尖鋭化した形態であるとするならば、一体何を行動の原理として、ニヒリストは積極的に政治運動にコミットしうるのであるか。それは無論、美学・美意識に他ならない。ニーチェ自身、早くも『悲劇の誕生』に於て、「世界は美的現象としてのみ是認されうる」という究極的テーゼを突きつけており、<sup>(10)</sup>従って、ファシズムの深層には、ニーチェのこのような問いかけに対する真摯な応答を看取することが可能であろう。ラクー＝ラバルトは、ハイデガーのナチズム問題を検討する中で、ナチスを「国家審美主義」として捉え返すが、我々もまたファシズムの運動を、ニヒリズムに対する美的肯定とその政治への適用形態として把握しなければならない。<sup>(11)</sup>

ところで神話とは、世界をトータルに説明し尽す一つの物語、或るパースペクティヴを採用することに依って世界を最終的に了解可能なものへと

変革してゆく作用であるとすれば、ナチスのイデオログたちは、まさにニヒリズムこそを「二十世紀の神話」として称揚していったのではないだろうか。というのも彼らは、ある意味ではニーチェの弟子として、世界に人間的意味が欠落していること、すなわち、世界は何らの目的をも義務をも持たない「生成の無垢」であることを、極限の美的現象として熱狂的に肯定するのであり、それは結局のところ逆説的に、ニヒリズムこそが世界をトータルにかつ最終的に解き明かす一つの説明原理として、神話 (=大きな物語) が有する固有の機能を果していることになるからである。ナチズムは、世界には意味がないのだという究極的な意味を世界に与えるのであり、それに依って、ニヒリズムの神話化を帰結させていったのだと言えよう。

1945年5月7日、すでに総統をなくしていた第三帝国は無条件降伏を承認した。「ニヒリズム革命」の遂行は、再びヨーロッパに大戦をもたらし、その結果、世界を美的に改造せんと企てたニヒリストたちの夢は破れ、ドイツは皮肉にも、史上類を見ない程の汚らわしく醜悪な歴史を背負って戦後の歩みを開始せざるをえないこととなったのである。<sup>(12)</sup>

ヨーロッパを席捲していったファシズムの嵐が吹きやむ時、産声を上げて間もないフランス第四共和制に於ては、実存主義が<sup>(13)</sup>時代の寵児として精神世界に君臨しようとしていた。スチュアート・ヒューズが言うように、「解放後しばらくして、サルトルと彼の名に結びつけられた実存主義哲学は、突然巨大なキノコ雲が立昇るように知的流行となった」<sup>(14)</sup>のである。この時期サルトルは、哲学の分野に於ける新たなベルグソンとして登場すると同時に、文学の分野に於けるジイドの正統なる嫡子として承認されていたのであり、当時、空位となっていた二つの玉座の待望久しい後継者に他ならなかった。だが、そればかりではない。アンナ・ボスケッティが鋭く指摘しているように、サルトルは、哲学と文学二つの分野を自らの身につに体現する初めての形象であり、その事実によって、この二つの領域の定義それ自体を一変させてゆく「フランス知識人界の申し子、その完璧な作品」と見做されうるのである。<sup>(15)</sup> さらに付け加えるならば、当時哲学と文学の両分野に於てサルトル

ルに比肩しえたのは、それぞれ、モーリス・メルロ＝ポンティ（1908～1961）とアルベール・カミュ（1913～1960）であったが、後にはサルトルと決定的に対立してゆく両者も、この解放直後の段階に於ては、サルトルを中心として展開しつつあった実存主義運動の左右の両輪として捉えられていたのである。実存主義はこの時期、傷つき汚されたフランスを再生する精神的指導原理として迎えられ、その思想は、フランスの未来を変革する新しい希望そのものなのであった。

だが、そもそも如何なる理由に依ってこの時期実存主義は、フランスの精神世界を導く思考たりえていたのであろうか。我々はここで再び、「ニヒリズム革命」としてのナチズムがフランスを占領・支配していた事実に思い到らなければならない。実存主義が新たなる精神的・実践的原理として、戦後ただちに熱烈な支持を勝ち得ていったその理由は、ファシズムに依るヨーロッパの蹂躪に求められるであろう。というのも第一に、実存主義の作家たちが30年代より描き続けてきた極限状況が抗独レジスタンス運動のただ中に於て、日常的リアリティを帯びつつ眼前に迫ってきたからであり、そして第二に、彼ら実存主義者たちは皆、レジスタンス闘争に関する非の打ち所の無い信用証明書を有しており、そのことが、解放後彼らの言説に圧倒的な説得力を授けていったからなのである。

だがより一層重要は契機は、ナチズムと同じく実存主義が、ニヒリズムの問題こそを時代が要請する焦眉の課題と見做していた事実に求めなければならない。実存主義者たちは、ナチスのイデオログ同様、人間的意味が剥げ落ち漂白されてしまった世界、すなわちニヒリスティックな世界を、それこそが唯一の現実的な世界、我々が住まう〈この世界〉に他ならないのだとしてこれを承認し、そこから眼を背けない姿勢を思想の第一の条件として措定してゆくのである。我々は息苦しく世界を見つめるが、世界が我々に視線を投げ返すことはない。この苦渋に満ちた認識を真理として引き受ける時、人間は、如何にしてそれでもなお行為を可能にしうるのであろうか。この問いかけこそ、あらゆるニヒリスト、及び、実存主義的思考様式に共通する問題構制なのであり、そしてファシストの側がこの問いに、「虚無を積極的に

活用することに依って!!」という解答を与えてゆくのに対し、こうしたテーゼを拒絶することから、人間的倫理の再建を計ろうとする者こそ、真正の実存主義者であると言うべきであろう。ナチスのイデオログと実存主義は、「神の死」という共通の事実認識から、対極的帰結を導き出してゆくのである。先に瞥見したように、第四共和制下のフランス人は、神話の不在を該印された社会の住人であり、従って、実存主義的思考が世界の不条理性・了解不可能性それ自体から人間的倫理を抽出しようとする時、換言すれば、もはや神話に依拠することなしに行為の規範を模索しようとする時、人々は、こうした厳格な立場こそが、第四共和制という神話以降の時代に適合するものであるとして、熱烈に支持していったのではないだろうか。我々は、第四共和制期に於ける実存主義成功の主要因を、レジスタンス神話に求めるのではなく——それは早くも、三党政治の崩壊に依って色褪せてゆくであろう——逆に、神話の不可能性から出発した思想の強度にこそ、その成功の所以を看取しなければならない。神話の喪失を体験した第四共和制に於て、イデオロギー諸党派は、それぞれマルクス主義・ゴースム・キリスト教に依って、政治的神話（＝世界の意味をトータルに解明することで、行為者に政治規範を教示する原理）の再創造を目指してゆくが、これとは逆に実存主義の側は、神話の不在をこそ、行動の第一の原則として認めていったのである。

だが我々はここで、或る看過すべからざる事実突き当たることとなる。それは第一に、1950年代に入ると、サルトル、カミュに代表される作家たちが、次第に実存主義的問題構制に導かれた作品創造から離れてゆくという事実であり、そして第二に、早くも第五共和制下の60年代、実存主義は——少なくともフランス内部の思想世界に於ては——すでに古き良き時代の哲学として、人々から忘れられつつあったという思想史上の現実に他ならない。先述の如く第四共和制は、レジスタンスの栄光よりその歩みを開始した。しかしながらその後、神話の不在という困難な状況の中で共和国は、あらゆる内部矛盾を解決不能のままに崩壊し、時代は「偉大なる父」という表象を具現化するドゴールの第五共和制へと動いていったのである。そうであるならば、第四共和制から第五共

和制への移行、しばしばクーデターとして非難されるその移行とは、父なるフランスの喪失から帰結された精神的空隙（＝第四共和制）が父の復活（＝ドゴール第五共和制）に依って贖われたという物語に於て語られるべき出来事であったのだろうか。その場合、神話の不可能から出発する実存主義哲学とは、まさに第四共和制下に於ける時代精神ではあったものの、しかしながら、第五共和制という父の再臨（＝神話の再現前）以後の世界に於ては、ニヒリズムの克服は遂行されてゆくのであり、従って、実存主義は必然的に没落する運命にあったのだと語られてしまうことになるであろう。

だが言うまでもなく、このようなストーリーは歴史の正鵠を射抜くものではない。何故ならば、政治史的枠組みに於ても、ドゴール個人のカリスマ性に依拠したボナパルティズム的議会運営は、皮肉にも、62年のアルジェリア危機解消以降決定的に失われ、ポンピドーを中心に組織された議会多数派的ゴリスムへと転換されてゆくことになるからであり、そして何よりも思想史的枠組みを採用するならば、60年代以降実存主義がそのポテンシャルを喪失してゆくことの主たる要因は、フランスの精神世界が再び神話的世界解釈——世界に現れる〈意味〉の最終的把握——に依ってニヒリズムを超克する所にあるのではなく、まったく逆に、神話化作用への批判・神話的世界解釈への攻撃が過激化していった点に求めなければならないからである。

1960年代特にその後半以降、フランス第五共和制下に開花した現代思想の潮流に於ては、「神の死」「ニヒリズム」「不条理」「実存的主体」という主題系はもはやアナクロニズムとして、批判の矢面に立たされていた。このような、実存主義的問題構制それ自体の乗り越えが時代の新たな指導原理として承認され、従ってニヒリズムに対峙する「主体」「同一性」「実存」「作者」「人間」が、逆に、死すべき存在として蛆上に載せられてゆくのである。それでは我々は、こうした精神史の流れを規定していった要因を何処に求めるべきなのであるか。ここで想起すべきは、実存主義が「ニヒリズム革命」を唱えるファシズムとの対決のうちに、自らを表現していったという事実である。ニヒリズムとは、言うまでもなく、トータル

な原理に依る世界の一貫した説明——典型的には宗教——を嘲笑するものであり、神話の不可能を宣告するものであろう。そうであるならば、そしてまた実存主義とは「神の死」や「ニヒリズム」を問題として浮上させ、これに対する闘争のうちに主体的行為・人間的倫理を可能にしてゆく立場であるとするのならば、実存主義は確かにプロとコントラという対極性を維持しつつも、ナチズムとまったく同様、ニヒリズムこそを世界解釈の万能の鍵として利用しているのではないだろうか。先に述べた通りニヒリズムとは、世界をトータルに説明することへの嘲弄であった。これを認めるにもかかわらず、ファシズムと実存主義は、逆説的に、世界を〈意味の欠如態〉として最終的に意味付けるのであり、そこから主体的・能動的行為を引き出すという倒錯に陥ってしまうのである。<sup>(16)</sup> ここに見られるのは、能動的行為を切望する主体の前に、世界として現前しているニヒリズムにすぎない。この段階に於けるニヒリズムは、いまだ実存的主体をその起源から包摂し融解させることはなく、従って、たとえ実存がニヒリズムの腐植土の中に爪の先まで埋められていようとも、その腐植土とは、主体的意識成立と同時に、或いはその後に見出されるものにすぎないのである。結局のところ、構造主義以降のフランス思想に於ける以上のような実存主義批判とは、先に我々が指摘したファシストと実存主義者に共通する事実認識——意味の失われた世界への主体の現前——に見られる構造それ自体を、攻撃の対象として指定していたのだと言えよう。神話の不在より出発する実存主義に於ても、それが明白な出発点＝〈起源〉を構築する以上、そこから再び神話を創造せんとする密やかな欲望を、ポスト実存主義の現代思想は看取り攻撃してゆくのである。これはすなわち、神話批判の過激化、脱神話化作用の過激化に他ならない。

さて、これまで瞥見してきたことから明らかのように、60年代後半以降フランス思想の先端に於ては、もはやニヒリズムは対峙すべき敵として問題化されることはなく、むしろ何かを問題として一義的に指定する態度そのものが、現代思想に依って問題化されてゆくのである。そして無論、ラディカルな批判を行うこの最後の立場もまた、次の瞬間には固定され神話化されてゆく危険性を常に孕

み続けるのであり、従って求められるべき倫理とは、常に自己のポジションをずらし続けてゆくこと、一つの問題構制を提示するに際して、その構築と解体を並列させてゆこうとすること、更には、このような自己言及性の悪循環から不意に脱却してしまうこと、模索されているのは、以上極めて困難な倫理なのである。同時に我々がここで注目すべきは、こうした状況、すなわち自己遡及が無制限化してゆく状況に於て、あらゆる最終的言明はすでに偽りの言明にすぎず、それ故すべての神話は、自らを定立させる地盤を喪失せざるをえないという事実であろう。論理的態度を採用する限り、神話は端的に不可能として認められるのである。<sup>(17)</sup> そうであるならば、我々は、ニヒリズムさえもがもはや特権的な問題とは見做されなくなってゆくポスト実存主義のこの時代に、逆説的ながら、神話の不可能性を宣告するニヒリズムの最終的勝利を認めなければならないのではないだろうか。60年代以降、実存主義の退潮と平行して、「神の死」或いは「ニヒリズム」は、眼前に現れ、それと積極的に闘争すべき聖なる対象からの没落を余儀なくされていった。ニヒリズムとは凡庸な一つの実事、自らに対する反抗すら喚起させえない陳腐極まりない事実へと変貌していったのである。だが我々は先に提示したように、ニヒリズムの凡庸化こそが、その最終形態であることを認識しなければならない。それをもはや誰もが否定せず、同時に、もはや誰もが対峙しようとはしない状態、すなわち遍在する凡庸性として捉えられてしまった状態、こうした状態に於てこそ、ニヒリズムは深く人々を侵しているのではないだろうか。<sup>(18)</sup>

以上、極めて性急に、従って必然的に過度の単純化を行いつつも、我々は第五共和制下の思想状況にまで筆を進めてきた。〈神話〉と〈ニヒリズム〉という対立項を基軸に、戦後フランスの精神世界を追跡した時、そこにかい間見えたのは、自らの凡庸化に依って最終形態に達したニヒリズムの姿である。このような状況、すなわち、無限に自己遡及しつつ主体を解体させてゆく状況を、政治学の言語へと翻訳するならば、それは無論、マ

イクロ・ポリティクスの問題、微細な権力ネットワークの問題、利害回路が迷路化してゆく問題、リプレゼンテーション機能の問題、つまりは、フーコー以降露呈されていったと言われる現代政治固有の困難に他ならない。今日、我々がこうした問題状況に対して如何なる態度を選択するにしても、この問題自体の重要性については、誰れ一人として否定しえないであろう。

しかしながら、本稿に於ける我々の考察は、社会科学が抱えているこの現代的課題それ自体を、研究の対象とするものではない。そうではなく、その歴史性を明らかにすること、すなわち、しばしばフーコー以降の問題として語られているこうした状況が、何よりも第四共和制の困難な歩みに於て生成し、従って、実存主義者たちがまず第一に、こうした問題への倫理的対応を迫られていた事実を明らかにすること、一言で言えば、第四共和制を現代史として捉え返すこと、ここにこそ、本稿に於る我々の課題が存在するのである。こうした観点に立つ時、我々にとって重要な意味を持つのは、先に提示した一つの実事、すなわち、1950年代以降サルトル、カミュらが自ら実存主義的問題構制から離れていったという事実であろう。カミュが『転落』を執筆し、サルトルが『道徳手帖』の完成を放棄することに依ってマルクス主義へと接近してゆくを見る時、我々はそこに、ニヒリズムの凡庸化・状況の自己遡及という、新たな課題に対する二人の真摯な応答、だが同時に、対極的な応答を看取しなければならないのではないだろうか。以下本論に於て我々は、最後には決定的対立へと帰結してゆく両者の思想展開を検討し、この仮説の正当性を論証してゆくであろう。だが、このような課題それ自体を検討する前に、我々はこれまであまりにも安易に用いてきた、従って、あたかも解釈に於けるマスター・キーの如くに使用してきた〈神話〉という概念そのものを、本稿の問題意識に即して、やや精緻に定義付けておかなければならない。この準備作業を怠る時、我々は〈神話〉という言語記号それ自体を神話化する、最も初歩的な倒錯に陥りかねないからである。

## 註

本稿に於けるサルトル・カミュ・メルロ＝ポンティカ

らの引用は次の略式記号を以て記す。

— サルトル —

- A =L' Age de raison, Gallimard  
B =Baudelaire, Gallimard  
C =Cahiers pour une morale, Gallimard  
CRD=Critique de la Raison dialectique, Gallimard  
D =Le Diable et le Bon Dieu, Gallimard  
E =L' Engrenage, Gallimard  
EH =l' Existentialisme est un humanisme, Nagel  
EN =L' Etre et le néant, Gallimard  
ET =Esquisse d'une théorie des émotions, Hermann  
H =Huis clos, Gallimard  
IA =L' Imagination, Alcan  
IF =L' Idiot de la famille, Gallimard  
IG =L' Imaginaire, Gallimard  
J =Les Jeux sont faits, Nagel  
M =Les Mots, Les Temps modernes, no 209-210, Gallimard  
Ma =Les Mains sales, Gallimard  
Md =La Mort dans l' âme, Gallimard  
Mo =Les Mouches, Gallimard  
Mu =Le Mur, Gallimard  
N =La Nausée, Gallimard  
O =On a raison de se révolter (avec Philippe Gavi, Pierre Vicror) , Gallimard  
R =Réflexions sur la question juive, Gallimard  
S =Situations I~X  
SA =Les Séquestrés d' Altona, Gallimard  
SG =Saint Genet, comédien et martyr, Gallimard  
Su =Le Sursis, Gallimard  
T =La Transcendance de l'ego, Recherches philosophiques, no 6, Vrin, 1965.

邦訳は人文書院サルトル全集の巻数・頁数のみを記す。

— カミュ —

- I =Albert Camus Théâtre, Récits, Nouvelles, Paris, Gallimard. 1962, édition établie et annotée par Roger Quilliot  
II =Albert Camus Essais, Paris, Gallimard, 1965, édition et annotée par R. Quilliot

et L. Faucon

- AI =Actuelles I chroniques 1944-1948 (I)  
AII =Actuelles II chroniques 1948-1953 (II)  
AIII =Actuelles III chroniques Algériennes 1939-1958, Gallimard, 1958,  
C1 =Carnets mai 1935 - février 1942, Paris, Gallimard, 1962.  
C2 =Carnets janvier 1942 - mars 1951, Paris, Gallimard, 1964.  
C3 =Carnets III mars 1951 - décembre 1959, Paris, Gallimard, 1989.  
Ca1 =Caligula, pièce en quatre actes (I)  
Ch =La Chute, récit (I)  
Cor =Correspondance : Albert Camus - Jean Grenier, 1932-1960, Gallimard, 1981.  
DS =Discours de Suède (II)  
E =L'Été (III)  
EE =L'Envers et l' Endroit (II)  
ER =L'Exil et le Royaume, nouvelles (I)  
Et =L'Etranger, roman (I)  
HR =L'Homme révolté, Paris, Gallimard, 1951.  
J =Les Justes, pièce en cinq actes (I)  
LAA =Lettres à un ami allemand (II)  
Ma1 =Le Malentendu, pièce en trois actes (I)  
MS =Le Mythe de Sisyphe (II)  
MCN =Métaphysique chrétienne et Néoplatonisme. Diplôme d'études supérieures de philosophie (II)  
N =Noces (II)  
P =La Peste (I)  
カミュ I —— 新潮世界文学全集第48巻カミュ I  
カミュ II —— 新潮世界文学全集第49巻カミュ II

— メルロ=ポンティ —

- AD =Les aventures de la dialectique ; Gallimard  
EP =Eloge de la philosophie ; Gallimard  
HT =Humanisme et terreur ; Gallimard  
OE =L' œil et l' esprit ; Gallimard  
PM =La prose du monde ; Gallimard  
RC =Résumé de cours, Collège de France ; Gallimard  
S =Signes ; Gallimard  
SC =La structure du comportement ; P.U.F.



S N S = Sens et non-sens ; Nagel

V I = Le visible et l' invisible ; Gallimard

邦訳は、みすず書房より刊行されている一連の訳業を参照する。

### 序文註

- (1) Sartre, S III, P. 63 (邦訳、第十巻43頁)
- (2) ibid., P. 68 (邦訳、第十巻47頁)
- (3) ibid., P. 69 (邦訳、第十巻48頁)
- (4) ibid., P. 65 (邦訳、第十巻45頁)
- (5) 中木康夫『フランス政治史 中』未来社162頁
- (6) 同上、179頁
- (7) Chapsal, J., La vie politique de la France depuis 1940, P.U.F., 1968, P. 136
- (8) Sartre, op. cit., P. 65 (邦訳、第十巻45頁)
- (9) cf. Barrett, W., Irrational Man—A Study in Existential Philosophy, Doubleday Anchor Books, New York, 1972, P. 36, Feuerlicht, I., Alienation, Greenwood Press, 1978, pp. 38—75, Schacht, R., Alienation, Doubleday Anchor Books, New York, 1971, pp. 264—267.
- (10) ニーチェ『悲劇の誕生』岩波文庫 63, 219頁
- (11) cf. ラクー＝ラバルト『政治という虚構』藤原書店
- (12) ナチズムに於て、審美主義的政治がアウシュヴィッツを必然的に帰結させる点に関しては、拙稿『美的自然と政治的空間——アルベール・カミュに於ける反抗の概念を巡って——』（六甲台論集、第三十九巻第二号、第四号）第三章第一節を参照。
- (13) あらゆるイズムに必然的に付き纏うことではあるが、

実存主義もまた、極めて問題の多い概念であり、その範囲を俄かには確定しがたい。この〈序〉に於て我々はただ、サルトル及び彼に率いられた『現代』誌グループ、及びその同調者を指すものとする。

- (14) スチュアート・ヒューズ『ふさがれた道』みすず書房115頁
- (15) アンナ・ボスケッティ『知識人の覇権』新評論 特に第6章参照。
- (16) 一時期サルトル、カミュに代表される実存主義的戯曲・エッセイ・小説に対して、〈不条理〉という意味付けを世界に与えるものにすぎないという批判が流行した。こうした議論の中で、最も注目すべき人物は無論、ヌーヴォー・ロマンの旗手アラン・ロブ＝グリエに他ならない。この点に関しては、以下本論の中で詳しく検討されるであろう。
- (17) レトリカルな表現が許されるならば、実存主義は「神話の不在」という〈神話〉、或いは、「神話なしに規範的行為を可能にする」という〈神話〉に依って支えられていたのであり、これに対して構造主義以降の思想は、こうした立場が露呈させざるをえない自己言及性そのものを問題化してゆくのである。このような観点に立つ時、先に見たサルトルの叙述、すなわち神話の不可能性について黙示録的に語る彼の叙述は、我々にとって極めて示唆的なものだと言いうるであろう。
- (18) ニヒリズムの凡庸化というテーマに関しては、次の文献から示唆を受けた。  
Carr, K. L., Banalization of Nihilism, State University of New York Press, 1992.